

稲発酵粗飼料用の水稻新品种 「べこげんき」

我が国においては、水田の有効活用および飼料自給率の向上の観点から、飼料用稲の栽培が奨励されています。

飼料用稲には、玄米を家畜に与える飼料用米向けと、穂と茎葉をまとめて収穫しサイレージにして牛に与える稲発酵粗飼料用があります。東北地域ではその両方の生産が盛んです。稲発酵粗飼料用には、収穫適期（黄熟期）の地上部全乾物重が多いことが必要です。また、作業分散の観点から食用の水稻品種の移植前に直播栽培できることや食用の水稻品種の収穫前に収穫できることも求められます。そこで、東北地域向けの直播栽培に適した早生で多収の稲発酵粗飼料用の水稻品種の育成を目指しました。「べこげんき」は飼料用系統「羽系飼864」と早生の発酵粗飼料用系統「青系飼161号（後の「うしゆたか）」を交配して、その後代から育成されました。

《「べこげんき」の特性》

「べこげんき」は、東北地域で広く栽培されている食用品種「あきたこまち」よりも出穂が早く、9月上旬に稲発酵粗飼料用の収穫適期（黄熟期）となります。このため、「あき

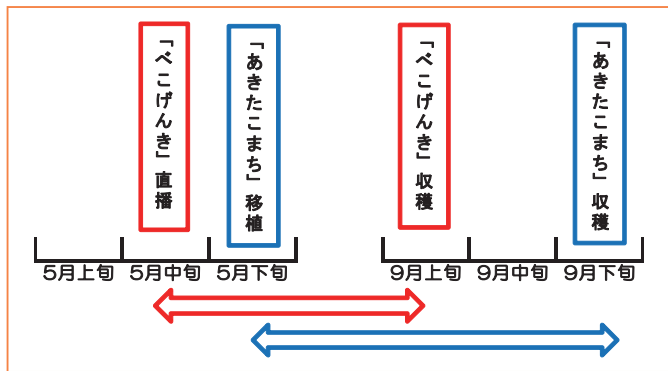


図1 「べこげんき」の栽培体系

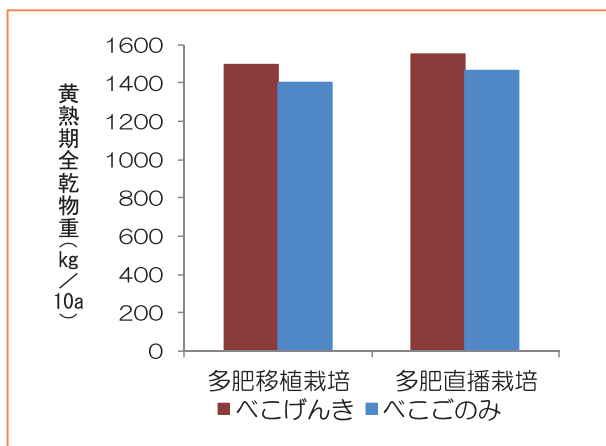


図2 「べこげんき」の黄熟期全乾物重

水田作研究領域

福 陽
FUKUSHIMA, Akira



たこまち」の収穫が始まる9月下旬までに収穫作業を終えることができます（図1）。

「べこげんき」は、移植栽培、直播栽培のいずれにおいても既存の稲発酵粗飼料用品種「べこごのみ」よりも多収です（図2）。また「べこげんき」は茎が極めて太く、耐倒伏性に優れるため、多肥の直播栽培においても倒伏の心配はほとんどありません。

「べこげんき」は、止葉が直立して極めて長い特徴的な草姿を持っています（写真）。また、玄米はやや大きく、白濁するなど外観品質が劣るという特徴があります。このため食用品種と容易に区別することができ、食用品種と混ざる危険はありません。

《栽培上の注意点》

「べこげんき」は耐冷性が強くないので、冷害の常襲地帯では減収する危険性があります。また、通常、いもち病は発生しませんが、病原菌レースの変化によりいもち病の発生が認められた場合は薬剤防除を行う必要があります。

今後、「べこげんき」が安定多収の稲発酵粗飼料用品種として、東北地域に広く普及することを期待しています。



写真／黄熟期における「べこげんき」の草姿